

9月25日（月）その74 「生きる力」にあふれている教師に！

先週の金曜日に報告会、修了式を終えました。非常に大きな山を越えましたね。ずいぶん肩が軽くなったと思います。いよいよ今週は残務整理やお別れ会等の日程があります。そして来週からは、待ちに待ったそれぞれの学校に戻り、「子ども達のために」忙しい毎日を送ることになりますね。

私は平成元年の後期に県立教育センターの研修を終了しました。その頃はまだ島尻教育研究所はありませんでした。渡名喜中の2年目で、妻や子ども達を渡名喜に残して単身赴任をしました。専業主婦だった妻が私の補充教員を務めるという離島ならではの体験もしました。センターには離島の教員のための寮があったので、そこに入りました。でも豊見城団地も借りたままにしていたので、週の半分は豊見城から通いました。

研究テーマは「自主的学習」でした。（内容の詳細は省略します。）これまでも何回か書きましたが、教員の力は著しく伸びるときがあります。やはりこのような長期研修をしたときとか、あるいは自主研修で強く改善を心に刻んでいるときなどです。自分の力量が伸びた体験を、「その10、15、17」などでも話しましたね。

さて、県立教育センター研修を終えて、私の授業は変わりました。子ども達にもっと数学の力を身につけさせてやりたいと燃えていました。「目標」、「形成評価」、「授業の反省」などを簡単に書き込むシートを活用したり、指導過程を工夫したりしました。また26人の中学生全員が授業のたびに提出する「数学の家庭学習ノート」に、丹念に赤ペンを入れました。人数が少ないので、本当に「個に応じた指導」ができました。その後、転勤した長嶺中でも数学の授業を頑張り、九州地区数学教育研究会で公開授業もやったのですよ（エヘン!!）。

教育研究所で長期研修を終えたことが、すごいことなのではありません。学校に戻ったときに真価が問われるのです。行く前と同じような授業をやったのでは困ります。忙しい中でも、学校の他の先生方が、「おっ!!なんか前と違うな」と感じるような授業をして、頑張っていたいただきたい。皆さんはすでに「新たなステージ」で勝負ができる力が身についたはずです。校長先生方もそれを期待しています。学校の中核的な教師として、授業も、その他の学校経営にも積極的に参画して欲しいと思います。・・・数か月後に、頑張っているかどうか校長先生に電話をして聞くからね。（笑）

何かで読んだけど「自分が持っているもの以上のものを、他の人に与えることはできない。」とありました。

修了式でも話しましたが、もう一回言います。

「何のために学ぶのか」を明確にして、「主体的・対話的で深い学び」の指導過程を通して、子ども達に「生きる力」を身につけさせるのです。

子ども達に生きる力を身につけさせたいならば、教師自身が生きる力にあふれていなければなりません。自らの日常生活の中で「主体的・対話的で深い学び」ができるよう心がけて欲しいと思います。脚下（あしもと）をしっかり確認して毎日少しずつずつ、一歩ずつ一歩ずつ。（脚下照顧）

一日が終わるときに、「今日一日頑張ったか？少しでも自分の力が伸びたか？」と、わずかな時間でも自問自答することは大切だと思います。

9月27日（水）その75 私の人生の道しるべ

生きていく上で自分を支えてくれる金言や座右の銘がある。多くの先人達が体験して体得したことが、淘汰・洗練されて今にある。だから金言達は、ことらの本質をついていて、多くの人が「その通りだ！」と納得できるものが多い。どういう言葉に出会い心に刻み込んでいくのかは、人それぞれである。私の生き方を支えた金言がいくつもあるが、2つを紹介しよう。

私の父親は50代頃からは村の議員などもやるようになったが、若い頃はカツオ船の船長だった。パラオやセレベスなどにも行った。大正11年（1922年）生まれだったので、生きていたら95才くらいである。

たった一度しかない青春時代は「沖縄戦」で、時代の波に翻弄された。私の父親達の世代は、「艦砲ぬ喰え一残さ一」（くえーぬくさ一）であった。

戦後に結婚し、次々と生まれる子ども達を育てるために必死に生きた。あの時代の人たちはみんなそうだったと思うが、自分自身のための楽しみがなく、子どもを育てるためだけの人生であった。

父は海の男で、赤銅色（しゃくどういろ）の逞しい体つきをしていた。父が酒に酔ったときに、いつも言っていたことがある。「汝の立っている場所を深く掘れ、そこに泉ありき」という言葉である。十才の頃くらいから何十回も聞かされた。「行きたければ、大学にも行かせる」とも言った。自分が家庭の事情で進学できなかったから、子どもにはそんな思いをさせたくないと思っていたのだろう。6人の子ども達を育てるため一生懸命に働いている両親の背中と、この言葉は私の心に刻み込まれ、私の人生の道しるべになった。

もう一つ、「脚下照顧」（きゃっかしょうこ）という言葉がある。私が30代の前半に、当時の校長先生が週案にはさんであった言葉である。日本や中国の古典に造詣が深く、いろいろな名言・格言を教えていただいたが、この言葉だけは、なぜか私の心に深く刻み込まれた。

「脚下照顧」とは、禅の言葉で、「他人のことを言う前に、先ず自分の足下を見て、自分の言動に気をつけろ」という意味であるらしい。転じて江戸時代には、「履き物をそろえる」という意味でも使われていた。私は「脚下をしっかりと照らして、自分自身を顧みる。」ということから、「背伸びせず自分の教育実践をしっかりと見つめて、一日一日確実に積み上げていくこと」と捉えることにした。

「自分の教育実践は、まとめるようにしなさい。」と教えてくださった先輩教師がいて、私は若い頃から意図的に実践をまとめるようにしていた。学級通信や文集等も製本したし、渡名喜中時代に3年間の実践録をまとめて「脚下照顧」とタイトルをつけた。それから南風原中の教務主任のときに「脚下照顧Ⅱ」、与那原中の教頭で「脚下照顧Ⅲ」、三原小校長の職員通信を「脚下照顧Ⅳ」、大里中の校長講話を「脚下照顧Ⅴ」、義務教育課長の5分間課長講話を「脚下照顧Ⅵ」、「脚下照顧Ⅶ」としてまとめて冊子にした。

脚下照顧という言葉は教えなかったが、中学生にも分かりやすく話をした。長い長い階段があったとして、一日一段ずつ登ると、一年で365段上ることになり、3年間では $3 \times 365 = 1,095$ 段になる。何もしないことは「0」で、0は3年間経っても0のままで、一段も登れないのである。

9月29日（金）その76 多くの人に支えられて

本日は、前期研究員への最後の5分間講話である。何を話そうか、ちょっと悩んでいた。いくつかの話が浮かんだが、ちょっとしっくりこない。寝る前にそのことを考えていたら、夢か現（うつ）か、目が覚めてしまった。午前2時である。「なんだ、すごい素材が足下にあるじゃないか！」と気づいた。（パソコンを打っている今は、26日午前2時30分）

研究員達全員にすてきなプレゼントがあった。一つは初代所長の宮城恒彦先生からの「重厚な額に入ったすてきな書画」。奥さんの美代子さんの水彩画が入った夫婦合作の書画である。教員だった奥さんは退職後に水彩画を始められたようである。お二人は結婚後60年を超え、これまで「2人展」も二度開催している。また書画以外にも、これまでに先生が出版した冊子（本）や印鑑も入っていたようである。研修生にとって一生の宝物になるだろう。

宮城恒彦初代所長は、研究所勤務を終えて20年余、毎年研究生が入所するときにもすてきな色紙に書いた書画をプレゼントしたり、修了証書の揮毫もなさってください。退職しても長い間、教師として島尻教育にかける想いがあふれている。本当にありがとうございました。

もう一つは知花賢正事務局長からの「書道講座の終了証書」。研究所ではボランティア講師による「三線」、「琉舞」、「書道」のクラブ活動を実施している。そのうち書道を7日間担当して下さるのが、知花局長である。

知花局長は、書の基本（第一步）から指導して下さる。また南部地区の昔の軽便鉄道などの知識も豊富で、南部の昔の風物や歴史なども語って下さる。最終的には研究員に「座右の銘」を書かせて、研究報告会で展示して下さっている。その書の完成作品と本人が筆の練習をしている写真を、講座の修了証書と一緒にラミネートして、一人一人にプレゼントをしてくれた。もちろん修了証書の字も知花局長の揮毫である。

ボランティアで講座を担当して下さるだけではなく、このようなプレゼントまでいただいて本当に至れり尽くせりである。感謝申し上げたい。

ちなみに南部広域行政組合の知花局長のポストについて、簡単に説明したい。本来各市町村でやるべき仕事を効率的に実施するためにいくつかの市町村が一緒になって「一部事務組合」を結成することができる。県内には26の一部事務組合があるらしいが、主に島尻地区の市町村で構成している一部事務組合が南部広域行政組合である。「施設課」（ゴミの最終処分場の建設に関する業務）、「新炉建設準備室」（3つの清掃組合を統合してゴミ処理の一元化を計ろうとする業務）、それに「教育委員会」（視聴覚ライブラリー、島尻教育研究所）がある。その全ての業務を統括するのが知花賢正事務局長なのである。

今回研修生たちが書にしたための言葉は彼らの「金言」や「座右の銘」であろう。それぞれの人生の中で体得して大切にしてきた、あるいは大切にしたい言葉であろう。5人が書いた言葉を紹介しよう。

- 七転八起（しちてんはっき）[山里] ○和氣致祥（わけちしょう）[伊禮]
- 君は君 我は我なり。されど仲よき（武者小路実篤の言葉）[阿嘉]
- 不撓不屈 [大浜] ○山紫水明 [山田]

最後まで多くの方々に支えられた研修であった。がんばれ、46期生達！

